

# 山と博物館

第 3 卷

第 1 1 号

1958年11月20日



## 冬山に朝の訪れ

大町山岳博物館

高橋秀男

厳冬期の遠見尾根。昨日午後から荒狂った天候は夜になって一層厳しい。静かな朝の訪れ、風雪もおさまったようだ。うずもれたテントを這い出たわれわれは雲行き激しい鹿島の北峰が赤み始めるのをみた。やがて「おゝご来光だ」除雪の手を休め、みんなで今日一日の幸を祈った。

大 町 山 岳 博 物 館

# 滝の話

京都趣味登山会 高田善博

私たちが山河を跋涉する時、谷間や溪流に必ずあの懐かしい滝の音を聞き、あの美しい滝の姿を見るのはなんと風情のあることでしょうか。昔から私たちほど滝を好む国民はないでしょう。なぜでしょうか。それはわが国は地形上無数の美しい滝に恵まれていることです。どこのどの滝を見ても、それはすばらしい変化と個性美にあふれて、しかもわが国特有の四季のうつりかわりによってそれぞれその美観を異にし、さらにそれが美しい歴史や伝説と融けあって私たちは滝に自然美を発見し滝の水に郷土の歴史を追憶するのです。座敷に滝の山水画を眺め、庭園に滝を造るのが私たち日本人です。画を描くにしても、写真をとるにしても歌や俳句を作るにしても、極めて滝の多いのは滝を愛する感情が私たちの心のどこかにあるのではないのでしょうか。



わが国各地の多数の名瀑中観光百選に入った滝を一位から述べてみましょう。

赤目四十八滝(三重県) 変化きわまりなき滝群と滝壺の美しさ。袋田滝(茨木県) 滝水に映ずる紅葉の錦は



日光華厳の滝(国立公園写真集より)

天下一品。白糸滝(静岡県) 数千条の瀑水、白糸の名を恥かしめない。浄蓮滝(静岡県) 類々と清らかな水を落とす伊豆の名瀑。関尾滝(宮崎県) 奔瀑と穴穴の奇観。秋保大滝(宮城県) 森林に轟く大瀑布の壮観。養老滝(岐阜県) 一直線に落下する伝説の滝。箕面滝(大阪府) 紅葉の溪谷、巾を楽しむ滝。黒山三滝(埼玉県) 夏といへども尚肌寒き霊瀑。奈曾白滝(秋田県)

壯観奥羽随一の名瀑布。以上の十名勝でいづれもその美しさは世界に誇るべきものがあります。しかしこれらに比し少しの遜色なき名瀑は外に随分あるのです。たとへば北海道の羽衣滝、奥羽の暗門滝、関東の華厳滝、中部の白水滝、近畿の那智滝、中国の神庭滝四国の轟滝、九州の白糸滝は最もわが国では人に知られた名瀑です。その他常清滝(広島県)、布引滝(兵庫県)、常布滝(群馬県)、五色滝(山梨県)、菩提滝(京都府)、法体滝(秋田県)吹割滝(群馬県)、仙娥滝(山梨県)、三段滝(広島県)、竜吟滝(岐阜県)、船尾滝(群馬県)、七泰滝(奈良県)、三条滝(福島県)、揚梅滝(滋賀県)、流星滝(北海道)、天河滝(長野県)、霧ヶ滝(愛媛県)、潜滝(山形県)、不動滝(長野県)、隠滝(三重県)、霧降滝(滝橋木県)、中ノ滝(奈良県)等々いづれもその滝の美しさは言語に絶します。



このように美しい滝の多いわが国の中で名高い大瀑布をのべましょう。第一位からあげると、403米の称名滝(富山県)、350米七瀧滝(三重県)、280米不動滝(長野県)、242米権現滝(長野県)を始め200米の高さを超える滝に布引滝(三重県)、白糸滝(山形県)、精進滝(山梨県)、白糸滝(福岡県)、御来迎滝(愛媛県)、界滝(山形県)、らがあります。以下182米羽衣滝(北海道)を筆頭に布滝(福島県)、風折滝(三重県)、白猪滝(愛媛県)、太田滝(兵庫県)、唐岬滝(愛媛県)、獅子滝(山梨県)、神庭滝(岡山県)等はいづれも直下150米以上の滝なのです。

なお、外国で有名な滝でその大きなものを順に述べれば、660米ヨセミテ滝(カリフォルニア)、610米タケナム滝(英領ギアナ)、606米グランド滝(カナダ)、580米スーザランド滝(ニュージーランド)、548米ツユゲラ滝(ナタール)、490米リボン滝(カリフォルニア)、460米ロレイマ滝(英領ギアナ)、420米カランボ滝(南ア連邦)、396米スライスキン滝(レイニア)などがあげられます。その他有名な滝で250米以上350米を算するものにタツカソコ滝

(コロンビア)、ウイドステア滝(カリフォルニア)、スタウフバツハ滝(スエーデン)、ヴェツチス滝(ノルウェー)、マルトノマー滝(オレゴン)、ガーソツバ滝(インド)があります。その他巨瀑に全長1000米エンジェル滝(南米ヴェネズエ



富士白糸の滝(国立公園写真集より)

ラ)や世界三巨瀑のイヴァズー滝(アルゼンチン)、ヴィクトリア滝(アフリカ)、ナイアガラ滝(アメリカ)の三瀑布がありますが、中でもイヴァズー滝のごときはブラジルとの国境にまたがって巾4000米・高さ85米・水量一時間八百万馬力に相当するという物凄い滝であります。



さて一体滝と言うものはどういう風にしてできたかといふと、まず溪谷があるでしょう。その溪谷の本流が侵蝕されてその両側が絶壁になると、支流の水はこれに懸って滝となるのは当然でしょう。塩原箒川や黒部峡谷の支流にこの滝が多く懸っておりますし、また陸前川渡の白糸滝や木曾の小野滝もそうなのです。このような原因でできた滝を「河蝕懸崖瀑」といいます。これが水河でできた場合を「氷蝕懸崖瀑」といって、有名なアメリカのヨセミテ滝やアルプスのラウテルブルンネン滝などがこの種の滝なのです。この河蝕懸崖瀑で本流との合流点から侵蝕されて次第に遠ざかり後退した滝もあります。箒川の電化滝などはその一例です。

さて一本の川が永年にわたって水底をけづる場合、岩石の違いで段を作り、自ら滝となるものもあります。阿武隈川の乙字滝は堅い安山岩から軟かい第三紀層に流れる際にこれをけずり穿って自ら滝となったのです。この他耶馬溪の五竜滝や奥入瀬川の銚子滝はこの種の滝でこれを「削崖懸崖瀑」とでも言ったらどうでしょうか。

これが大陸の水河の削磨によって地表の硬軟に段が生じてできた滝にあのナイアガラ滝があります。

次に河流の作った崖の途中に岩の隙間を洩れ出す水が流出しそのまま落下して多くの滝を連ねる場合があります。これを「潜流懸崖瀑」と称して富士山の四囲に多くよい例があります。たとえば井の頭の四瀑、佐野の瀑布田原滝などは、つまり富士山に降った雨が表面の熔岩の下に浸み通り、その下にある基底熔岩に沿って伏流した

ものが裾野で急に表面に現われた時河床の熔岩が堅いため浸蝕を受けずそれが滝となったものです。あの白糸滝は最も有名です。

また海岸で激浪のため断崖を作り川が滝となって海へ落ち込む「海蝕懸崖瀑」は北海道や台湾の海岸、内地では佐渡や伊豆の海岸で見られます。

さて浸蝕のみが滝を作るものではありません。往々にして他の原因で出来た場合もあったのです。その第一はいわゆる断層でできた急斜面に懸る滝で大阪の箕面滝、神戸の布引滝、岐阜の養老滝などみなそうなのです。外国でもこの種の滝が多くその適例にヴィクトリア滝やイヴァズー滝があります。ヴィクトリア滝は高原のふちに達したザムベジ川が大きな地割の中に飛び込んだのです。この種の滝を「断層懸崖瀑」と呼ぶのです。

これとよく似た滝で地層の皺(しわ)によって起ることもあったのです。ロッキー山脈東の七段滝などがその例でこのような滝を「皺曲斜面滝」といいます。

断崖や皺曲に次いで火山の作用でできた「火山懸崖瀑」です。火山からふき出した岩山が谷をせきとめて滝を作る場合で、中禅寺湖をつくった男体山の熔岩が華厳滝を作った例がそれで、その他八町滝などわが国で多く見ることができます。それから氷河の堆積物が氷河の削った谷の末端をせき止め、その上流に溜めた水が溢ふれて滝となる場合もあったのです。有名なフィンランドのイマトラ滝はその適例です。

さてすべての滝がその原因がわかるわけではないのです。滝の現在の位置や川底のようすを見てその滝がどうしてできたかを知るのはいさなかなむづかしいのです。最近華厳滝に対し大々的に学術調査が行われ、神秘の扉に包まれていた滝の詳細が明らかにされたことは、私たちの記憶に新しいところです。このように滝は観光的ばかりでなく、学術的にも大へん興味の深いものだと思います。

# 信州文学碑散歩

(11)

屋代高等学校教諭 福沢武一

## 木崎湖畔小波句碑＝大町市大字平森＝

きょうの土曜日は、拓本に絶好の小春日和。心地いい陽射の中をバスは走る。王子神社の森が後にずれ、蓮華爺、鹿島の山列が見やられる。逆光線に雪が輝いている。木崎の部落に入る。すでに家敷木は裸。木崎で下車。森部落の裏、湖畔をぬける。夏の賑わいにひきかえ、いまわいたくさびれた風景。岸の棧橋に主婦たちが鄙びた声を響かせて漬業を洗っている。

湖に臨む土手にのぼる。そのかみの仁科城址。仁科神社の境内だ。小波の句碑は西寄の木陰に立っている。台石は高さ70センチ。高さ130センチ、幅50センチ前後の碑面は平ら。でも、荒けずり。そこに心地いい配字で一句が浮き立っている。その字もまことに垢ぬけして快的。

刈り余すモトドリ塚や夏の草 小波

やおら拓本にかゝる。碑の大きさはまさに画仙紙大。その上にぬれた布をあてがい、ブラシを当てる。筆勢のある字体の肩が紙を破っている。

タンポンを使う。運筆の趣きと共に、碑面の美しい模様様が、織りだされてくる。心の中で賛嘆おくあたわな僕である。

一句のモトドリであるが、当地方に君臨した仁科家の遠祖仁科盛運が承久の乱に越前(と)波山で戦死した。

そのモトドリを家臣がもち返って弔った。傍の吉色蒼然たる塚がそれである。いまでこそ神社として整備されている。が一昔前は一帯の草地だったとき。

小波についてちょっと誌す。——明治3年東京に生れ紅葉の硯友社に参加し、小説を物した。やがて少年読物に手をそめ、24年代表作「黄金丸」を発表。博文館においてその方面の編著に従事、日本童話文学草わけの役目を果たした。一方、俳文学をたしなみ明治28年尾崎紅葉、伊藤松宇らと秋声社をおこし、後、内藤鳴雪の「卯杖」などにも関係する。句碑はそうした彼が当地へ足を印した記念である。建碑は大正14年、平林吉徹氏によることが碑蔭によってしられた。小波は木崎夏期大学の開設当時大町の平林家へ投宿したときいている。それはたしか大正6年のことである。

十一月の夕暮は早い。境内の碑を拓本し終らないうちに、もう薄暗くなっている。しばらく小波句碑の前に戻って、感慨にふける。その間も夕闇は身のまわりに刻々深くくなっていく。



## 信濃を訪れる冬鳥

大町山岳博物館学芸員補 千葉彬司

紅葉が一枚また一枚と散り風が冷くなる頃、冬鳥が日本へ渡ってきます。

鳥類の「渡り」ということは、昔から世界中の民族の間で不思議な問題としてとりあつかわれていました。ある季節によって鳥が姿をかくしました現わすということは古くから知られておりましたが、どこに行っているのかということは知られておりませんでした。

例えば中国ではツバメは泥の中にかくれて越冬する。また日本ではホトトギス、ツバメは木の洞に入って越冬すると考えられた時代もありました。その後科学の進歩するにつれて、「渡り」というのは、鳥が藩殖地から越冬地へ行くのだということがわかりました。

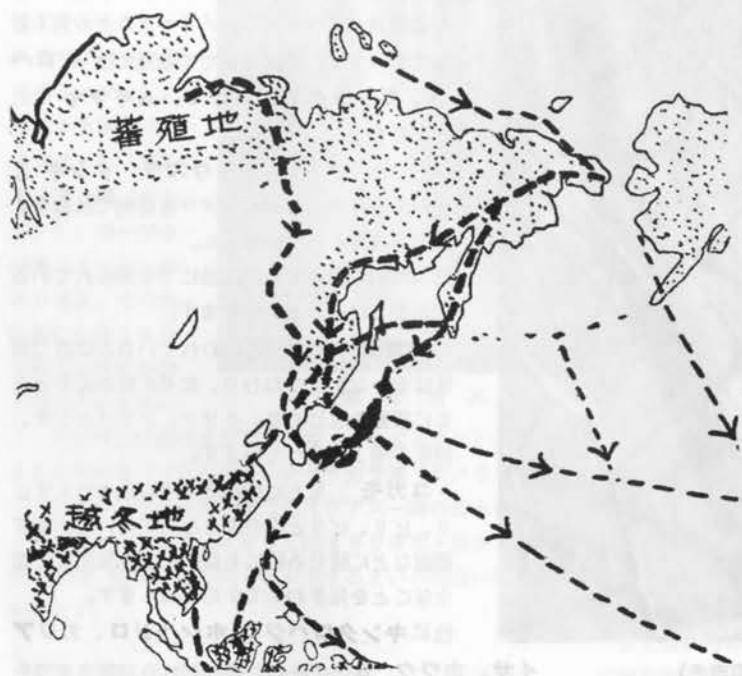
冬鳥というのは日本より北の方で蕃殖し、越冬するために日本に渡ってき、翌年の春再び元の藩殖地に帰って行きます。これからの季節はこれらの鳥の鳴声でにぎわいます。

冬鳥が日本に渡ってくる経路は、カムチャツカ、千島の蕃殖地から、北海道を経て渡ってくるもの。シベリヤ樺太、北海道を経てくるもの。北海道で蕃殖したものが本州へ南下するもの。シベリヤから日本海を経て北陸地方へそれから中部、関東方面へ分散するもの。シベリヤ満州方面の蕃殖地から朝鮮、九州を経て本州西部に渡ってくるものに大別されます。

鳥の渡りの際は種類によって非常に大群をなして移動



## 鳥の渡り



します。人の目にふれるのはほんの渡りの一部であって人の目にとまらないことが多いのです。その理由は、多くの鳥は昼間「渡り」をしないからで、もっとも型の大きいもの、飛翔力の強いもの、力の強い鳥などは昼間「渡り」をします。ガン、カモ、のごときものは昼間渡りを営むもので、夜渡る鳥の場合は、害敵におそわれることが少ないことと、昼間安全な場所で休みながら餌をとれることなどがあります。

渡りの季節は昔から彼岸が標準となっており、冬鳥はほぼ10月の中旬頃から翌年の4月下旬までで、やはりこれも種類によって、遅く来たり、早く帰ったりします。雪が降りはじめ付近の山々が白くおおわれると夏の間山林に棲んでいた小鳥が人家付近の木々の枝に姿を見せはじめます。

シジウカラ、ヒガラ、エナガなどの一般にカラ類と呼ばれているものです。その中にまじって遠くシベリヤ、樺太方面から渡ってきた鳥の声も聞かれます。

**キレンジャク** 1500メートル以下、潤葉樹林にすみ特にヤドリギの寄生するクリ林に多くすみ、常に10~30羽、多いときは100羽くらいも群れをなし、餌をあさる時も群をなして木の実をついばんでいます。ナナカマド、ノイバラ、ヤドリギの実など好んで食べます。チリチリ、またはヒリ、ヒリ、ヒリと細かい声で鳴き1羽がとび立つと全群一斉にとびたつのが常です。

**ジウビタキ** 900メートル以下の平地や、灌木林、農耕地、草原、村落附近にすんでいます。単独で生活し、灌木の頂き、尾根の上などの見通しの良い所にとまり、尾を上下させてヒツ、ヒツ、ヒツ、ヒツと澄んだ声でなき、長い距離や、高いところを飛ぶことは余りなく、低いところを梢から梢えに直飛します。ヤマウルシ、ヌルデなどの木の実を食べ、アリ、ハムシ、ゴミムシなどの昆虫をも食べます。

**シメ** 800メートル以下の雑木林に多く、渡りの時期には、10羽くらいの小群をなしているが、冬季には単独で生活をしています。高い梢にもとまり地上におりて種子などをついばむところも見かけます。尾羽は短く、体は太く、くちばしは短かく太い特徴を持っています。チツツ、チツツとか、チョチョツ、チョチョツと金属的な声でなき、ムクノキ、ヤドリギの実などを食べます。

**タヒバリ** 渡りには10羽内外の小群で群れ、冬期には梢にとまることは殆んどありません。両足を交互にして歩き、はね歩くことなく地上で餌をあさります。ピツピツ、ピツ、ピイ、ピイ、ピイと高い声で鳴き、冬季はタデ、エノコログサなどの植物質を食べ、夏季には昆虫を食べています。

**ツグミ** 1500メートル以下のカラマツ林、アカマツ林、潤葉樹林にすみ、地上、樹上で餌をあさるのです。地上では足を交互にして、少し歩いてはチョツト立ち止まったりします。渡りの時には100羽以上の大群で飛来することもあり、ノイバラ、ツゲの実などを食べ昆虫も捕食します。

**アトリ** 渡来初期には2500メートル以上の高山帯でウラジロナナカマドの果実をついばみ、嶺に雪が降るようになると、村落付近に姿をあらわします。10羽以上の群れで樹間をとび、地上で餌をとることが多く、飛び立つときには一斉に飛び上り、キョツ、キョツ、キョツとはげしくなき合い波状に飛翔します。穀類の地上におちたものを拾い、タデ、ミズヒキなどの種子を食べています。

**マヒワ** 1500メートルから2500メートル位の亜高山のコメツガ、オオシラビソなどの森林に多く、雪が訪れはじめると次第に山麓に移り、雑木林に群れ集るのがみられます。10羽から100羽くらいの群れで高く低く飛び



## ツグミ

(大町市内)

チュウイン、チュウインと鳴き、樹枝の間を活潑に餌を求めて移動します。シラベ、コメツガなどの植物質を主にたべています。

**ベニマシコ** 1000メートルくらいから下の山地の灌木林、畑、草原などにすみ、北ア地方では500メートル以上の地に多く、平地の林などにはすんでいません。フィー、フィーとウソに似たような声でなき、アワ、キンエノコロなどの植物質を食べています。

**イスカ** 1000メートル以下の松林にすみ繁殖期以外は群を作り、地上に下ることは稀で、樹上生活を主としています。ピヨイ、ピヨイ、ピヨイと鋭い声で鳴き、マツの種子を好んで食べ、その他にもナナカマドサンザシの実も食べます。

**マミチヤジナイ** アカマツ、カラマツの疎林に多く地上は足を交互にして歩いたり、一足とびに餌をあざって歩きまわるのを見ることが出来ます。渡来期にはいちぢるしい数で群を作る。キユル、キユルン、チ

ユリーとさえすり、警戒時にはキョツ、キョツキョツと鳴きます。昆虫のオサムシ、カミキリなどを食べヤマザクラ、ノイバラなどの実も好んで食べます。他に渡ってくる鳥にはシロハラ、カシラダカ、ノゴマ、ムギマキなどがあります。

草原にくる鳥としてはウズラ、タシギなどがあります。しかしウズラは信州では繁殖するものは知られていません。

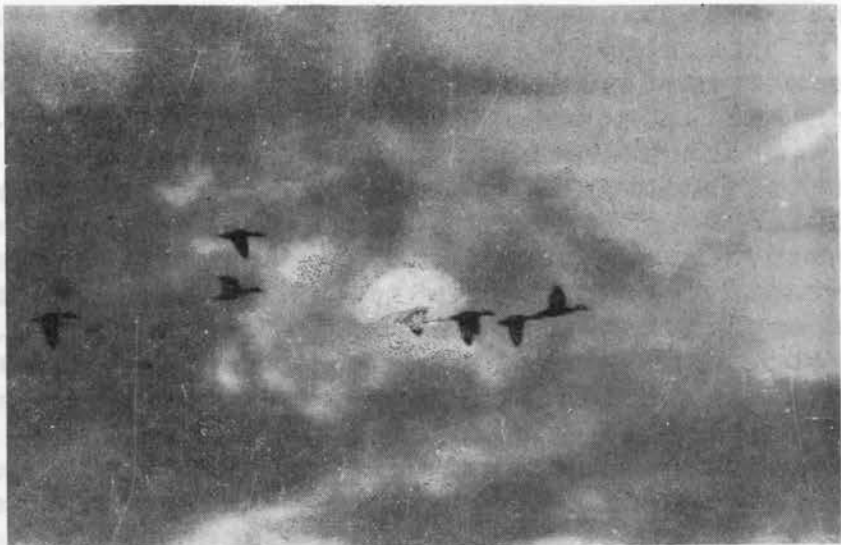
河川湖沼に渡来する鳥は誰にでも知られている鴨類を上げることができます。

**マガモ** 青クビといわれているのは雄で昼間は安全な水上でねむり、たそがれが迫るとともに活動をはじめます。クワツ、クワツとなき、植物の種子を食べています。

**コガモ** 水上に群れ遊ぶ時も雌はたえずピリ、ピリ、ピリと笛のような声でなっています湖面などに降りる時にも数回上空を旋回して安全なことを見きわめてから下降します。

他にキンクロハジロ、ホシハジロ、カワア

イサ、カワウなどが冬わが国に訪れるお客さまであります。文化の進むにつれ、野性動物はその数を減じてき、あるものにおいては、絶滅してしまったものもあります。野鳥のもたらす利益ははかり知れないほどです。例をあげますとムクドリの中にも28匹のメイトウを発見これはただ1回の食事であるから1日少なくとも80匹以上は食べていると内田清之助博士はいつています。このような例を見ても農業上、林業上、利益をもたらしける野鳥は大切に保護しなくてはならないと思います。



## マガモ

(大町市青木湖)



## 狡智にたける？キツネ

### その話題は豊富

○…キツネは孤独の放浪者である。スギやヒノキの造林の中を足音もたてずにさまよい歩く姿は、とてもあの精悍・狡智にたけたキツネとは思えない、日本でも昔から人をだますとか、いじめると祟りがある、というような話が多くある。——山道を遅くに通ったら肥溜に入って月をながめ高吟している人を見かけ、つれ帰って聞いたら、マンジウを食べて風呂に入って行けとすすめられたと……次の朝良く見たらマンジウは馬糞だったとか——闇夜の山の端を灯がチラチラと見えかくれに一つについて今夜はキツネの嫁入だなどといわれている。しかしこの種の話は日本に限ったことではない、イギリスの動物書にもある——鼻の先に雑草をのせてそろそろと鴉の群に泳ぎ寄って行ったり、ウサギに転がったり跳んだ

りして見せ、ウサギが好奇心を起して近よると不意におそいかかって捕えたり、猟犬にかぎつけられ追われると水の中に入ったり、下肥を体にぬりつけて自分の体息を消してごまかそうしたりする。——

日本の話にくらべると、多分に真実性をおびているようであるが、イギリスの話だからといってどこまで信じて良いものやらわからないが、キツネの棲むところいたるところでその狡智が話題になっていることは認めないわけにはいかない。

○…北アルプス地方では減少して人の目にふれることはすくない。それは夜行性であるということと、彼ら一匹の行動範囲が広いことからでもあろう。キツネを捕えるのには普通鉄砲とトラバサミ(ケモノがふむとバねがはずれて、足、首、頭などをはさむ)が使われるが、彼らの臭覚は容易にはトラバサミにはかからない。四年程度前に長野県美麻村で一頭捕えられ、本館で飼育中落命した標本が一体あるが、その後捕えられたような話は聞かない。

○…普通は一匹で暮しているが、交尾期の1~3月には、一匹のメスを数匹のオスが追いまわし、オス同志ではげしい闘いをする。その勝利者が花婿になるのは動物の世界の掟のようなものである。棲家は穴の中、それも相当やわらかい土でない自分で掘らないでアナグマなどの古い穴に落ちつく、あ

いている穴がない様な時にはアナグマの

使っている穴に入り込み、尿、糞などをしておくアナグマはその悪臭に耐えられず、穴をすずるともいわれている。春の日ざしが強くなる3~5月2~9匹の仔が生まれ、葉が紅葉をはじめると穴をすて一匹一匹独立の生活に入る。大きい耳と敏感な鼻は地下のネズミをおそい長い尾はジグザグに逃げる獲物を追って方向転換をするための平衡器の役目をはたしている。

(千葉彬司)



# カシラダカ

長沢修介

冬の到来とともにカシラダカが大群でやって来た。かってカシミ綱が横行した頃は大量に捕獲されたが今は

禁鳥だから彼らも安心して渡ってこられるだろう。カシラダカは東部シベリヤ、カムチャツカ地方に蕃殖して日本海を横断し、裏日本に到着して積雪の少ない地方で越冬するのである。

この鳥は常に群がって生活し外敵に対して危険信号を備えている。それは尾羽の外側、二枚が白色になっていてふだん尾を畳んでいる時にはあまり目立たないが飛び立つ時には良く目立つので何か危険がせまった時一羽が飛び立つと他の者もこれを見て一せいに飛び去る。このような習性は他の群棲する鳥にも多く見られるし、また野山を歩いていても良く見られる光景である。

カシラダカとは「頭高」の意味で鳴く時や木の枝に止った時など頭の毛を逆立てる習性から出たものだろう。渡来期前の3月下旬頃から大群を作り始め4月頃には一本の木に数百羽もの大群を見ることがある。冬なのチツツという地味な鳴声とは違ってヒバリのようなさえずりを聞かしてくれるのもこの頃である。

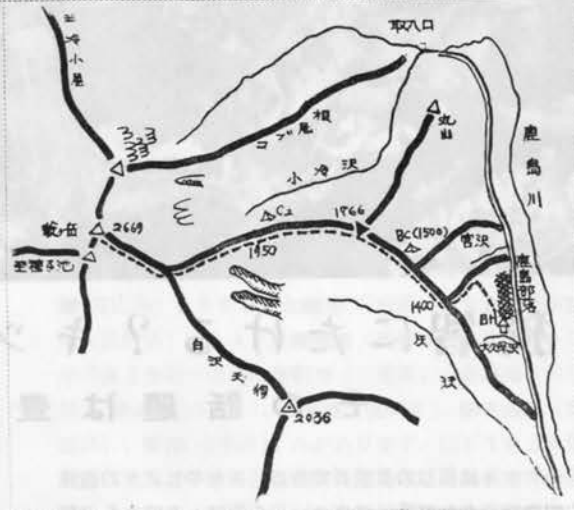
## 厳冬期の爺岳にいどむ 大町山の会で計画

大町山の会は厳冬期爺岳矢沢尾根を極地法で登頂する計画で11月に入り2回に渡って下見登山を行なった。鹿島部落狩野氏宅をB、H（ベースハウス）に、1500メートルの地点にB、C（ベースキャンプ）を設け、A、C（アタックキャンプ）は1950メートルの地点に設置し爺岳第二峰を攻撃する。1月15日～24日の間に隊員15名が参加して行なわれる。

### 大阪でスキー百科展

産業経済新聞、大阪新聞社、サンケイスポーツ主催、大阪府市教育委員会、本館後援のスキー百科展は11月18日～23日まで大阪阪急百貨店で行われた。同展はスキーの歴史、世界、日本のスキー場、スキー用具、スキー技術などで、本館からスキー歴史に関する資料70点、大町地方の雪具など65点が出品され、好評を博した。

**編集後記** 本号にはるはる京都趣味登山会から玉稿が寄せられ、一段と光彩を添えることができました。今後も広く山岳愛好者の寄稿を期待してやみません。本



紙も巾の広い編集で、各々の分野にどれ程満足いたまっているかどうか、はなはだ疑問に思います。内容をもっと山岳講座、山と科学、自然科学等、あるいは山岳新聞博物館新聞のような性格にしぼった方がよいともいいます。皆さんはどうお考えになりますか。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。  
大町山岳博物館

山と博物館 第3巻第11号 1958年11月20日発行  
発行所 長野県大町市TEL（大町）211  
大町山岳博物館  
印刷所 松本市巾上町353  
信州印刷株式会社